



案内人 すんみ



65

映画監督として名を馳せるイ・チャンドンの小説集。作家として活動していた頃の作品であり、邦訳を待ち望んでいたファンも多いだろう。独裁政権と高度経済成長、朝鮮戦争による南北の分断など、作品が書かれた時代を背景に、権力による暴力、経済格差、理念の対立などの状況下で自分の理想と現実のはざままで揺れ動く人々を描く。表題作の舞台である上溪洞は、人口急増による住宅難の



解消のため1980年代に新興住宅街として開発され、大規模マンション団地が建てられた。強引な開発で下水道施設もまともに整備されていない町は不快な悪臭が漂っている。主人公のジュンシクは妻と2人で上溪洞のマンションを購入し、新しい暮らしを始める。妻は居間に水槽とビデオとオーディオセットを置く計画を立て、「立派なマンションの住民」になった幸福感にひたっている。マンション

『鹿川は糞に塗れて』

イ・チャンドン著(中野宣子訳、アストラハウス・2860円)

理想と現実のはざままで

を買うことは、貧しかったジュンシクの長年の夢だった。がむしゃらに働いてきたし、多少の不正にも目をつぶってきた。この土地が「マンションを建てるためにもともと住んでいた人たちを強制退去させて」いたことも黙認している。しかし、腹違いの弟ミヌの登場により、このマンションと生活が、「ゴミの堆積層の上、あらゆる汚物と憎悪と捨てられた夢」の上に成り立つのではないかという認識を持つようになる。

韓国において中産階級の指標になったマンションは欲望の対象となり、建設ラッシュを招いた。その陰で、貧しい先住民たちが土地を追い出されるという歴史は現代も繰り返されている。92年に発表された『鹿川は糞に塗れて』は、2019年に演劇として上演された。一昔前の作品をなぜ今上演しようと思ったのかという観客からの質問に、プロデューサーは「作中に描かれたマンションという題材は階級、階層、富、不動産、教育など同時代的な問題に通じるものがあり、今でも古びずに私たちに訴えるものがある」と答えている。過去に限

らず、今も韓国社会は様々な問題の堆積の上に成り立っていることを照らし出す作品となっている。



すんみ(翻訳家)

*次回は17日に掲載予定。

文化